

「大学入試改革」 どう変えるのか

— 主体的な学びを実現し、広く社会に貢献できる人材を育てるために —

平成27年度

大学改革 シンポジウム 報告書

開会あいさつ

島根大学長 服部 泰直

島根大学の服部でございます。

本日は、島根大学の大学改革シンポジウムとして入試改革に焦点を当てまして、「『大学入試改革』どう変えるのか」ということでシンポジウムを開催する運びとなりました。このシンポジウムにつきまして、このような多数の出席をいただきまして、まことにありがとうございます。また、このような多くの方の出席いただけるということは、それだけ大学入試、入試改革ということについて皆さんが大きな関心を寄せていただいたものと、改めてその責任の重さを感じているところでございます。

皆さん御存じのように、大学入試につきましては、センター試験の改革を含めてこれから大きく変わろうとしております。あわせて各大学の個別試験につきましても、それぞれの大学が今後いかにより学生を選抜し、育てていくかということに焦点を当てた入試改革がこれから始まっていくところでございます。島根大学につきましても、このようなことで、今後入試改革について真剣に議論し、新しい入試制度としての育成型入試の構築に向けて今議論を始めたところでございます。本日のシンポジウムは、その改革の一環としてその方向性を定めるべく、また、我々が大学としていかに入試というものを考え、皆さんと意識を共有していくかということでのシンポジウムでございます。

本日は、基調講演として、リクルート進学総研所長、また文部科学省の高大接続システム改革会議の委員をされております小林浩様をお迎えして、後ほど基調講演をいただくことになっております。また、事例紹介として、島根県立松江北高等学校長の泉先生、それから、広島県立西条農業高等学校長の立上先生、本学の地域未来戦略センター長である松崎のほうから3件の事例紹介をさせていただき、その後、パネル・ディスカッションをさせていただきたく考えております。また、本日は、主催は島根大学、それから、共催として国立大学協会ということでございまして、国立大学協会から一鶴様、それから石澤様が御出席いただいております。また、入試改革ということでございまして、大学入試センターのほうからも、事業部事業第1課の課長補佐、内田和人様、それから、同じく、事業第1課の企画調査係であります青木智美様も御出席いただいておりますので、後ほどディスカッションの際にでも、また御意見を賜ればうれしく存じます。

本日のシンポジウムが島根大学の入試改革の方向性を定めるために大きな一助になることを祈り、また、島根大学としては全国の大学に先駆けて新しい形の入試を作成すべく、これから検討していきますけれども、少しでもこのシンポジウムが役立つことを祈っております。皆様の活発な御議論、それから意識の共有等をさせていただければ幸いに存じます。これから3時間ほどのシンポジウムでございますけれども、このシンポジウムが実り多いことを祈りまして、挨拶の言葉とかえさせていただきます。



平成27年度 大学改革シンポジウム

「大学入試改革」どう変えるのか

—主体的な学びを実現し、広く社会に貢献できる人材を育てるために—

開催日：平成27年11月6日(金)
会 場：くにびきメッセ 小ホール
主 催：島根大学
共 催：一般社団法人国立大学協会

目 次

■ 開会あいさつ

島根大学長 服部 泰直

■ 第1部

○基調講演【高大接続改革で何が変わるのか?】..... 1

小林 浩（リクルート進学総研所長／リクルート「カレッジマネジメント」編集長
文部科学省高大接続システム改革会議委員）

■ 第2部

○パネル・ディスカッション【高大接続から入試改革を考える】..... 23

パネリストによる取組事例紹介

1. 泉 雄二郎（島根県立松江北高等学校 校長／島根県公立高等学校長協会 会長）..... 24
2. 立上 良典（広島県立西条農業高等学校 校長／広島県高等学校長協会 会長）..... 34
3. 松崎 貴（島根大学生物資源科学部 教授／島根大学地域未来戦略センター長）..... 41

○総合討論 58

■ 付 録

アンケート結果 68

シンポジウムポスター 69

第 1 部

基調講演

【高大接続改革で何が変わるのか？】

小林 浩 (リクルート進学総研所長／リクルート「カレッジマネジメント」編集長
文部科学省高大接続システム改革会議委員)

基調講演 高大接続改革で何が変わるのか？
「高大接続改革について
～制度改革でどう変わるのか～」

リクルート進学総研所長

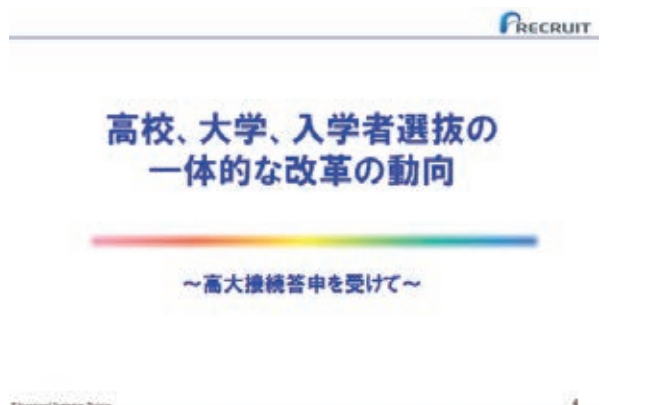
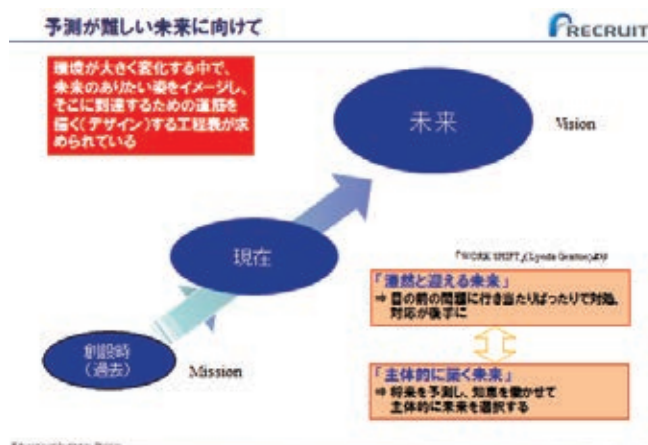
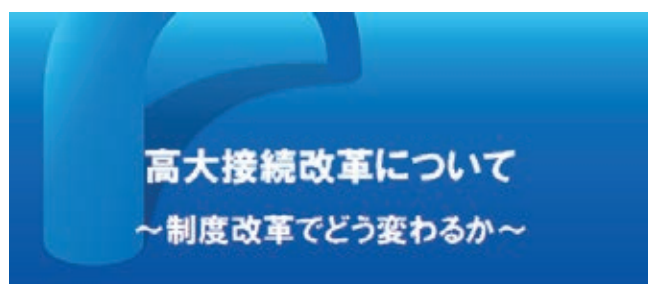
リクルート「カレッジマネジメント」編集長

文部科学省高大接続システム改革会議委員 小林 浩

皆様、こんにちは。ただいま御紹介にあずかりましたリクルート進学総研所長でリクルート「カレッジマネジメント」編集長の小林でございます。きょうはよろしく願いいたします。

きょうは、いただいたテーマが高大接続改革についてということで、制度改革で大学、高校がどのように変わっていくかというような形でお話をさせていただきたいというふうに思います。いつも私の講演、最初におわびを申し上げているんですけども、私がせっかちで早口なものですから、そして、この資料もかなり膨大な量が入ってて、普通は1時間半ぐらいのものを1時間にぎゅっとまとめて御説明、共有させていただくことにします。ですので、皆さん、スピードラーニングだと思って、キーワードだけお持ち帰りいただけるように、ストーリーをつくってお話ししますので、御理解いただければというふうに思っております。略歴のほうは先ほど御紹介ありましたので割愛しますが、システム改革会議の前の高大接続特別部会の委員もさせていただいておりました。

最初に、こんなスライドを入れております。過去があって現在があって未来があると。何でこんな図を入れてるかというと、未来には2つあるというふうに言われています。「ワーク・シフト」いうロンドンビジネススクールのリンダ・グラットンさんという方が書かれて、非常におもしろい本なので読んでいただければというふうに思いますが、一つは漫然と迎える未来ですね、目の前の問題に行き当たりばったりで対処し、対応が後手に回ると、もう一つが主体的に築く未来、将来を予



測し、知恵を働かせて主体的に選択する未来ということで、環境が大きく変化する中でありたい姿をイメージして、そこに到達するためのデザインを今つくっている最中じゃないかと。現在から積み上げで考えていくとなかなか難しい改革だと思いますが、未来からさかのぼって今考えられているというような議論だと思っていただければというふうに思います。8月に出た教育課程の中間まとめのところも、2030年に社会を生きる若者へみtainな形のメッセージで出されていたというふうに思っております。

1) 高校、大学、入学者選抜の一体的な改革の 動向 ～高大接続答申を受けて～

まず、高大接続答申を受けてということでお話をさせていただきます。もう皆さん御存じのとおり、中央教育審議会というところにいろんな分科会があって、大臣の諮問によって議論をしているところですが、もともと高校までの案件は初等中等教育分科会、大学の案件は大学分科会というところで、ある意味、世の中的にいう縦割りで議論が進められてきて一緒に議論をされることはありませんでした。今回初めて高大接続特別部会ということで、高校と大学を初めて一緒に議論をするというふうなことが行われておりました。

じゃあ、そもそもこの高大接続の議論のとはどこかという、私はここだと思っております。2011年の11月に、中教審の中に初等中等教育分科会、先ほどの中に高校教育部会というのが20年ぶりにできました。2010年には民主党政権下で高校教育が無償化されました。そうしますと、ほぼ高校までの進学が義務教育と同じような状況になってくるというようなことで、非常に高校教育が多様化したというような時期だったというふうに思います。

そこで、高校教育部会のほうで出た3つの課題というのがあります。それが、非常に多様化した高校教育の共通の目的とは何でしょうか、2つ目が、余りに多様化した生徒の実態に合わせてどのように学習指導を行って

いくか、3つ目に、高校における学習評価、学校評価をどのように行って質保証を図っていくかというふうなことが出されました。その中で、今後の方向性として、一つが、高校で共通して最低限身につける力、これをコアの学力というふうに設定して、それを高校の学習到達度テストではかりましょうということが出されていきました。これは今の基礎学力テストのもとだというふうに思っています。そのほかに、各学校が教育目標を明確にして評価する質保証の仕組みを構築するというのが前提にあります。ここから文部科学大臣から諮問をされまして、選抜機能を果たせず早期化する大学入試、勉強時間の少ない日本の大学生と高校生、知識偏重、点数至上主義、あるいは一発勝負による選抜ということで諮問されたということだというふうに思っております。

教育改革の背景

～グローバル化とユニバーサル化の進展～

こういった教育改革の背景、今いろんな教育改革が起こっておりますが、2つあるというふうに思っております。一つがグローバル化、一つがユニバーサル化。ユニバーサル化は日本語に直すと大衆化というふうに言われています。グローバル化の文脈でいいますと、社会環境が大きく変化することによって求められる人材像が変化しているということになります。従来は欧米をキャッチアップして肩を並べるための教育ということで、高度成長期ですね、人口ボーナス期、多分ここにいらっしゃる皆さんは人口ボーナス期を生きてきた方々だというふうに思います。どんどん人口がふえてくるので安定した労働力ですね、



欧米というある意味モデルがあってそこにキャッチアップしていくということで、均質的で正解を早く効率的に求める力というのが求められてきました。今後、現在もそうってきていると思いますが、グローバル化、このグローバル化というのは欧米化ではなくて、多極化というふうに言われています、国境がなくなっていくと。今、2020年までに人口がどこがふえてくるかという、欧米ではなくて東南アジアとかインドとかいったような東南アジアが人口がふえてくるというふうになっております。なので、毎日イスラムの問題とかってということが課題になってくると。2050年に向けてはどうかというと、今度ナイジェリアを中心としたアフリカが人口がふえてくるというふうに言われています。

そうしたグローバル化の中で、2025年までの世界の留学生を見てみると、現在の、世界各国全部を合わせると450万人ぐらい留学生がいるというふうに言われています。これが10年後、2025年には800万人にまでふえるというふうに言われています。その多くがアジアで動いていくと。ある大学の先生に伺ったら、アジアの学生はいとも簡単に国境を越えてくるというような表現をされていました。国境を越えて人材が流動する時代になってきてまして、インドや中国の高校生は今進路指導でどうしているかという、世界地図を見ながら、どこの国の大学に進学するかというような議論をしているそうです。きょうの朝刊をごらんになった方いらっしゃると思いますが、TPPで、その域内で人がもっとビザを簡単にして行き来ができるようにということで、広域に人材が動くということがもう間近に近づいてきているというような状況です。

一方で、日本はどうかというと、人口減少期に入ってきます。今まで経験したことのない時代です。人口ボーナスに対して人口オーナスという言い方をします。人口オーナスは日本語に直すと負荷がかかるという意味だそう

文部科学省 中央教育審議会とは

文部科学大臣の「諮問」によって、文部科学大臣または各行政機関の長に意見を述べる(審事)

分科会の名称	主な所掌事項
教育制度分科会	1.量から質へ変化した創造的な人材の育成のための教育改革に関する重要事項 2.地方教育行政に関する重要事項
生涯学習分科会	1.生涯学習に係る制度の整備に関する重要事項 2.社会教育の振興に関する重要事項 3.視覚教育に関する重要事項
初等中等教育分科会	1.初等中等教育の振興に関する重要事項 2.初等中等教育の基準に関する重要事項 3.教育職員の養成並びに資力の保持及び向上に関する重要事項
大学分科会	大学及び高等専門学校における教育の振興に関する重要事項
スポーツ・青少年分科会	1.学校保健、学校安全及び学校の施設に関する重要事項 2.青少年教育の振興に関する重要事項 3.青少年の健全な育成に関する重要事項 4.体力の保持及び増進に関する重要事項 5.スポーツの振興に関する重要事項
高大接続特別部会	大学入学選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について調査審議すること

<経緯>中央教育審議会(中教審)における高大接続の動き

2011年11月 中央教育審議会に初等中等教育分科会に高等学校教育部会設置
⇒1991年答申以来、20年ぶりに高校教育のあり方について議論

高等学校教育の3つの課題

- 1)高校教育の共通目的は何か
- 2)多様な生徒の実態に合わせて、よりきめ細やかな学習指導をどのように行うか
- 3)高校における学習評価、学校評価が不十分。高等学校の質保証をどう図るか

今後の方向性

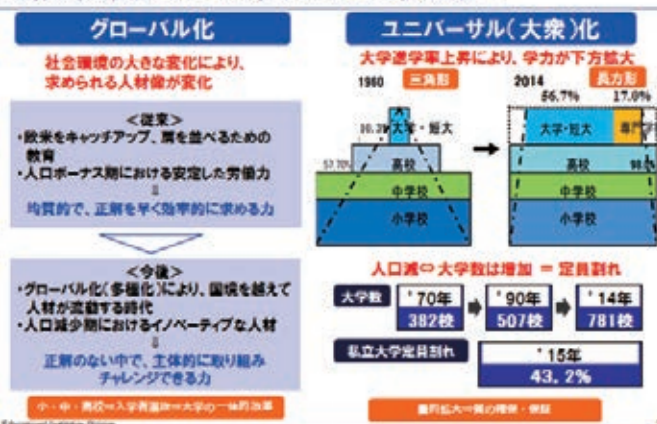
- 1)高校で共通して最低限身に付ける力のコアを設定(高校学習到達度テストの検討)
- 2)各学校が教育目標を明確にし、評価する質保証の仕組みの構築

2012年8月28日 文部科学大臣から諮問
「大学入学選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について」

2012年9月 高大接続特別部会が中教審直下に新設
⇒1年を目途に大学入学選抜の在り方を検討する

- 選抜機能を果たせず、早期化する大学入試
- 勉強時間の少ない日本の大学生と高校生
- 知識偏重、点数至上主義による選抜

教育改革の背景～グローバル化とユニバーサル化の進展～



今の入試制度の何が問題なのか？

入試における「高校の学力把握」と「大学の選抜」のダブルバインド

高大接続の国際比較：接続の2側面と日本の特殊性	
	(1)教育上の接続 = 学力把握
アメリカ・欧州	共通テスト ①資格試験(バカロレア、アビトゥーア、GCE)、②任意の共通テスト(ACT, SAT)
日本	なし(高校卒業は高校長の権限)
	(2)進学先選択上の接続=選抜
アメリカ・欧州	個別学力試験なしの接続=選抜 別個の共通・個別試験があるのは英仏のごく特殊校
日本	①個別学力入試 ②AO・推薦入試

センター入試の課題

- ・55万人受験、6教科29科目にまで拡大、適用面での負担が限界に(リスクの増大)
- ・知識偏重型、一斉勝負の形式

です。ボーナス期はいいことしかなかったですが、減少期は負荷がかかってくると。そうした中で、若者が少なくなってくる中で、一人一人がイノベティブな人材であるということが求められてきています。ある意味、正解のない中で主体的に取り組んでチャレンジできる力というのが求められてきてると。これ大学だけで変えるのは難しいでしょうということで、小中高入学者選抜を一体的に変えていこうということになっています。

また、ユニバーサル化の文脈でいきますと、左側が1960年、こっちが現在になりますが、1960年代は高校に進学するのが約6割、大学に進学するのが1割しかいなかったわけですね。ですので、45人学級ですね、小学校のでいくと、4、5人しか大学行かないと。新聞で私の履歴書とか私の交友録を見ると、社長の友人はみんな学者だったりとか医者だったりとかするのは、この時代はエリートだったからですね。今、これが台形を通り越して長方形になったというふうに言われています。高校も98%、ほぼ100%に近い。地方に行って保護者にインタビューすると、こんな保護者がふえてきています。ただだから高校行かせてるんだというような保護者も少なくない状況になっています。短大、大学合わせて56%、大学だけで51%、専門学校が17%いるんですね。1960年には専門学校制度がありませんでした。1970年代に専門学校制度ができて、合わせると約8割が高等教育機関に進んでると。ここにまた新しい学校種と実践的な職業教育をするような新しい学校種をつくるというような議論も進められています。その中で大学の数は倍にふえてます、70年からですね。今、高校生の保護者の世代が90年ですけども、そこから比べても1.5倍になってきているというような状況です。なので、ことしの私立大学の定員割れは43%ですね、半分近くが定員割れになっているというような状況で、量を拡大する時代から質を確保、保証する時代に変わってきたというふうなことが言えるとい

うふうに思います。

今の入試制度の何が問題なのか？

じゃあ、今の入試制度、一体何が問題なんのでしょうか。これは審議会で出された資料なんですけども、入試における高校の学力把握と大学の選抜のダブルバインド、二重の足かせということが言われていました。教育上の接続、これを学力の把握、それから進学先選択上の接続、これを選抜というふうに言って、先進諸国と比べるとアメリカやヨーロッパは学力の把握を共通テストで行います。ヨーロッパは資格試験、フランスのバカロレア、ドイツのアビトゥーア、イギリスのGCEという形ですね。アメリカは任意の共通テスト、ACT、SATという形で行いまして、学力試験を共通で行いますので、個別選抜では基本学力試験はありません。書類ですとか面接、エッセイっていうのをつくりながら、あとは奨学金なんかを活用して進学先を選んでいくというようなことになっています。

日本は共通テストがありません。個別の学力試験、AO推薦入試という形で進められています。この審議会の中で、ある先生が調べてこられたところ、日本の個別試験、区分別にいうとどれくらいあるかというと、何と1万2,000以上、入試の種類があるということです。高校の進路指導の先生、大変だというふうに思います。センター試験の課題ですね、55万人受験して、6教科29科目まで拡大して運用面での負担が限界になってきていると。ことしセンター試験の前日、私、長崎の大学にお邪魔してたんですけども、そこで何と1時間置きに新聞社から電話がかかってきてました。何か問題起こってませんか、何か問題起こってませんかっていうような、そういった笑い話じゃないことが本当に起こってるんですね。知識偏重、一発勝負という形で、センター試験の日にインフルエンザにかかったら終わりというような状況になっています。

これからの高大接続の考え方

じゃあ、どう変えていこうかというところ

なんですけども、これ、私が言ってるんじゃないで、なくて教育再生実行会議が言ってるんで御容赦いただきたいんですが、今までの高校教育は受け身の教育でしたということを言ってます。これをどんなふうな表現で言われていたかという、チョークアンドノート型の学習というふうに言っていました。先生が黒板にチョークで書いて生徒はノートに書き写して知識を吸収するというような、チョークアンドノート型の学習という言い方をされてきました。大学もそれを100人教室、300人教室でやってるのが今までの教育だったんじゃないかと。入学者選抜にいろんな負荷がかかっていたのではないかとこのように言われていました。

例えば、高校生の学習意欲の喚起、高校生が勉強するのは卒業するためではなくて受験があるからだということですね。それから、高校における幅広い学習の確保、これが何かというと、勉強する科目は受験科目にあるからだということですね。世界史未履修問題というのを覚えていらっしゃる方も多いと思います。世界史は必修科目ですよ。しかし、特に進学校の私立理系クラスなんかでいうと、世界史を履修しなくて、受験対策としてその時間を数学に充てたりというようなことが問題となりました。それから、高校における学力の状況の把握、これも共通テストではかるわけではなくて、業者がやる模試で、偏差値で序列化されているというような状況です。大学も同じで、大学の教育水準や教育の質の評価を何で行っているかという、これ大学側が言ってるわけではなくて業者がやる模擬試験で序列化されていると、卒業時は何も評価するものがないというような状況です。

これを変えていこうということで、高校は高校で質の保証をしていこうということ、学習到達度テスト、主体的に学ぶ力を育みたいということで、ここに高等学校基礎学力テストが入ってくると。ということで、高等学校基礎学力テストは第一義的には入学者選抜ではないということを言ってるわけ

です。つまり高校の質の保証として学習到達度テストを入れると、それが今基礎学力テストというふうになっているということです。大学は大学で質的転換を図りながら志願者の意欲や適性、総合的な能力を多面的、総合的に評価していこうということで、大学入学希望者学力評価テストというふうに共通テストを変えていながら、各大学の個別選抜を変えていこうというような大きな仕組みになっています。

高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について

それでは、去年の12月22日に出た高大接続改革答申ですね、この中身45ページぐらいあるので、もちろんここに来ていらっしゃる皆様ももうお読みいただいていると思いますが、念のため1ページにまとめてみましたんで、共有をしたいというふうに思います。大体こんなことが書かれています。現状の高校教育、大学教育、入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力、判断力、表現力や主体性を持って多様な人々と協働する態度など、真の学力が十分に育成、評価されていないというふうに書かれています。高校教育については、学習指導要領を抜本的に見直して、育成すべき資質・能力の観点から構造の見直しや主体的、協働的な学習指導法であるアクティブ・ラーニングへの飛躍的充実を図るというふうに言っています。教育の質の確保、向上を図り、生徒の学習改善に役立てるため、高等学校基礎学力テストを導入すると。ここでも高等学校基礎学力テストの目的は教育の質の確保・向上であり、生徒の学習改善であるというふうにうたっています。

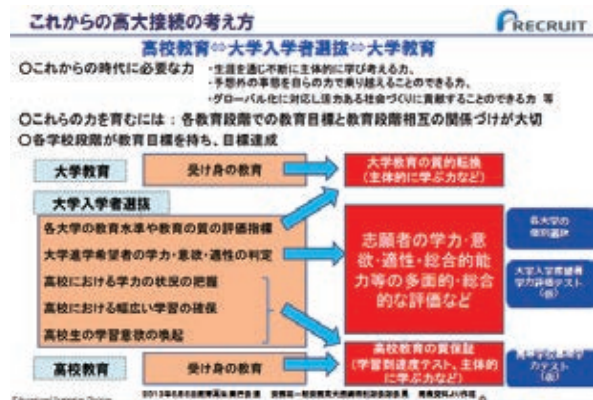
大学教育については、学生が高校までに培った力をさらに発展・向上させるため、ここが重要になります、個々の授業科目等を越えた大学教育全体としてのカリキュラム・マネジメントを確立するというふうに言っています。大学で各授業ごとのシラバスはつくっているというふうに思います。それを体系化してくださいということを言ってるわけですね。カ

リキュラム・マネジメントを確立してください。欧米等ではカリキュラムにナンバーリングというのがされていて、基礎的なものから100番台、200番台、300番台、400番台というふうに体系化されていて、それができていると単位の互換とかが容易になってくると。大学入学者選抜においては、現行のセンター試験を廃止し、大学で学ぶための力のうち、特に思考力・判断力・表現力を中心に評価する新テストを導入するというふうに言っています。個別選抜については、学力の3要素を踏まえた多面的な選抜方法ということが書かれています。学力の3要素は、学校教育法上に書かれているんですが、高校の先生は皆さん知っているんですが、意外と大学の先生方が御存じないというような状況があるというふうに思います。ですので、ちょっと後で簡単にまとめております。学力の3要素を踏まえた多面的な選抜方法をしてくださいと。具体的な選抜方法に関する事項を各大学がその特色に応じたアドミッション・ポリシーにおいて明確化してくださいと。これを法令上位置づけるというふうに言っています。多分、設置基準とかそういうところに入ってくるんじゃないかというふうに思います。

これからの社会で求められる「確かな学力」

じゃあ、学力の3要素というのは何でしょうかということ、学校教育法の第30条第2項に書かれています。基礎的・基本的な知識・技能の習得、これがまず1つ目。2つ目が、得た知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、3つ目が、主体的に学習する態度というふうに書かれています。これを昨年12月に出された答申の中ではちょっと読みかえをしています。言ってることは変わらないんですが、社会で自立して活動していくために必要な力という観点で捉え直しています。

ちょっと戻りますと、なぜかということ、これが今まではこの学力の3要素があるんですけども、どちらかというと、入学者選抜では



高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（案）

- 現状の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性をもって多様な人々と協働する態度など、**実の「学力」**が十分に育成・評価されていない。
- 高等学校教育については、**学習指導要領を抜本的に見直し**、育成すべき資質・能力の観点からの構造の見直しや、**主体的・協働的な学習・指導方法であるアクティブ・ラーニング**への積極的充実を図る。
- 教育の質の確保・向上を図り、生徒の学習改善に役立てるため、**新テスト「高等学校基礎学力テスト（仮称）」を導入**。
- 大学教育については、学生が、高等学校教育までに培った力をさらに発展・向上させるため、個々の授業科目等を越えた大学教育全体としてのカリキュラム・マネジメントを確立するとともに、**主体性を持って多様な人々と協働して学ぶことのできるアクティブ・ラーニングへと質的に転換する**。
- 大学入学者選抜においては、現行の大学入試センター試験を廃止し、大学で学ぶための力のうち、特に「**思考力・判断力・表現力**」を中心に評価する**新テスト「大学入学者希望者学力評価テスト（仮称）」を導入**し、各大学の活用を推進する。
- 個別選抜については、**学力の3要素を踏まえた多面的な選抜方法をとるものとし、（中略）具体的な選抜方法等に関する事項を、各大学がその特色等に応じたアドミッション・ポリシーにおいて明確化する**。このために、アドミッション・ポリシー等の策定を法令上位置づけるとともに、**大学入学者選抜実施要項を改正する**。

これからの社会で求められる「確かな学力」

学力の3要素

- ① 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③ 主体的に学習する態度

（学校教育法 第30条第2項）

今日の吾等では、社会で自立して活動していくために必要な力という観点で捉え直す

学力3要素からなる確かな学力

- ① これからの時代に社会で生きていくために必要な、「**主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）**」を養うこと
- ② その基礎となる「**知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力**」を育むこと。
- ③ さらにその基礎となる「**知識・技能**」を習得させること。

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入について

中央教育審議会（第101回）
（9月28日）資料より

1. 基本的事項

① 目的
○ 高校生が身に付けるべき基礎学力の確実な育成に向けて、高校段階における生徒の基礎学力の定着度を把握及び提示できる仕組みを設けることにより、**生徒の学習意欲の喚起、学習の改善を図るとともに、その結果が学習改善等により、生がすることにより高校教育の質の確保・向上を図る。**

② 対象者
○ 上記目的のより確実な達成を目指す観点から、**「学校単位での参加を基本としつつ、生徒個人の希望に応じた受検も可能」とする。**
○ できる限り多くの参加を促すため、問題内容、実施時期・方法の工夫や、**作問等での高校教員の参画を検討。**

③ 具体的な制課設計の考え方
【現行学習指導要領下（平成31年度～）】

① 対象教科・科目
○ 円滑に導入する観点から、**国語、数学、英語での実施**（一部の教科・科目を選択して受検することも可能とする）。
○ 現行の学習指導要領において、**基礎教育段階での学習内容の確実な定着を図る**こととされていることを踏まえ、**基礎教育段階の内容も一併含める。**

② 問題の内容
○ ポリ・ユニ・ゾーンとなる平均的な学力層や、底上げが必要な学力面で課題のある層を主な対象として出題。
○ **「知識・技能」を問う問題を中心としつつ、「思考力・判断力・表現力等」を問う問題をバランスよく出題。**

③ 出題・解答・結果提供方式
○ 試行を通して、**CBT（紙）を導入する方向で検討**。紙によるテスト実施も課題に置きつつ検討。
○ 正誤式や多肢選択式を中心としつつ、多様な解答方式を検討。
○ 学習の目標になりやすく、学習の成果が実感しやすいよう、**「100%以上の正答率が結果を提供」**、また、単元毎など分野別の結果や各設問の出題のねらい等を提供することを検討。

知識・技能の習得というところにちょっと偏り過ぎてませんかということが言われているわけです。これを学力の3要素を踏まえて、今回は、学力の3要素から成る確かな学力と言いつ方をしています。逆から読むと同じことを言っています。知識・技能を習得して、その知識・技能を活用してみずから課題を発見して解決する思考力・判断力・表現力ですね、3つ目が、主体的に学習する態度をちょっと読みかえていまして、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度、これを主体性・多様性・協働性というふうに呼んでいるわけです。

「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の導入について

こうしたものをベースに、まだ検討中ではございますが、中間まとめのほうで高等学校基礎学力テストについてこのように書かれています。まず、目的ですが、ここでも何と書かれているかと、高校生が身につけるべき基礎学力の確実な育成に向けて、つまりこれが最初の中教審の高校部会のほうで出てきたコアの学力ですね。高校生が必ず身につけるべきコアの学力をここではかつていこうというふうにしています。高校段階における生徒の基礎学力の定着度を把握するものだと。生徒の学習意欲の喚起、学習の改善を図るとともに、成果を指導改善等に生かすことにより、高校教育の質の確保・向上を図るというふうにしています。ここでも第一の第一義的な目的は、高校の質の保証であり、基礎学力の確認ということで出されています。

対象者については、ここが実は審議会でもシステム改革会議でももめましたというか、まだもめていますというところだというふうに思います。対象者は、学校単位での参加を基本としつつ、生徒個人の希望に応じた受験も可能というふうにしています。これ何をもめているかというところ、基礎学力テストは高校の学力の把握であり質の向上であれば、私はこれは全員が受けるべきだと、思っております。これが誰を対象にするかというところ、ポリ

ムゾーンとなる平均的な学力層や底上げが必要な学力面で課題のある層というふうに言っています。つまり、ある意味、大学入って点数のできない大学生、漢字の書けない大学生をなくしていこうというようなことだというふうには思います。ただ、この子たちが、今、受験料が1回当たり数千円というふうに言っているんですね。つまりボリュームゾーンとなる、今までのいわゆるAOっていうオールオーケー入試となっているような、ある意味、大学さんとかで教科型の試験を経ずに入った子たちにちゃんと学力の基礎をつけていこうということだとは思いますが、この子たちがわざわざお金を払って基礎学力テストを受けるインセンティブがないというふうに思います。なので、基本的には高校の質の保証・確保なので、これはきちんと国がお金を出して全員が受けるべきだというふうに私は思います。国立競技場にあんなにお金をかけるんだったら、こっちにかけたほうが日本の未来に役立つんじゃないかと私も思っておりますが、ただ、高校は義務教育ではないということで、希望者が受験すべきじゃないかというような先生方もいらっしゃるって、ここは、今、まだ議論を進めている最中です。中間まとめでの落としどころは、文科省は学校単位での参加を基本とするというふうに言っています。これを学校の質保証に使っていこうというふうなことです。それ、後でまた御説明します。作問も高校の先生が参画すると、なぜなら、高校の質保証だからですね。アメリカのSATとかACTは高校の先生が出題したりとか採点をしているというふうなことだそうです。

具体的な制度設計、これも31年度からというふうになっていますが、二段階で導入が考えられています。平成31年、2019年、オリンピックの前の年に導入をして、最初はコアの学力はどこに設定するかというと、昨年11月の答申の中では、英、数、国、理、社の必修科目5教科が入っていました。しかし、今回はコアのコアということで、英、数、国っていうところが最初に導入しましよ

出題方法が、これが余りなじみのない言葉だと思いますが、CBT－IRTというふうに言っています。CBTというのはコンピューター・ベイスト・テストです。コンピューター上でテストを受けるというような形になります。IRTは、日本語に直すと項目反応理論とか項目応答理論ということらしいですが、わかりやすく言うと、TOEICとか英検とかってというのは年に何回受けてもレベルそろってますよね。そういった複数回受けてもレベルがそろったような形のテストです。CBTとIRTは直接連動してませんので、CBTの開発がおくれたら最初は紙によるIRTのテストを行っていくというようなことも念頭に置くというふうに書かれています。じゃあ、フィードバックの仕方はどうなるのかというと、じゃあ300点満点であなたは198点ですではなくて、10段階以上の多段階で結果を提供するというふうに言っています。つまり、なぜかというと、これは高校生の学習意欲の改善に当たりますので、1回目受けたときに、例えば15段階の13段階だったとしたら、頑張ったら9段階目まで上がったというふうに、頑張った分だけ実感ができるようなぐらいの多段階で結果を提供しようというふうになっております。

実施回数も高校2、3年生で2回ぐらいということ。なぜ高校2、3年生かというと、基本的にはコアのコアの学力なので全て高校1年生で学ぶ内容になっています。なので、高校2年生で受ければ大体わかるということなんです。先ほど申し上げたとおり、一部

の専門高校や定時制高校というところなんかを見ますと、こういった3年生でも受験できるようにしようというふうな形の仕組みになっています。学校単位で受験する場合には高校で実施しようということが書かれています。

活用のあり方としては、生徒による主体的な活用とともに、高校での指導改善や国や都道府県等の教育施策の改善に利用するというふうに言っています。31年から34年までは試行期間と位置づけて、大学入学者選抜や就職には用いないというふうに言っています。やはり第一義的な目的は高校の学力の把握、質保証なので、これは当然かなというふうに思いますし、先週、その会議が行われまして、高校の校長会とかからの意見表明では、この選抜に使うというのと質の保証というのが2つの目的があるためにちょっと混乱しているんじゃないかと。どちらかというと、高校の質保証のほうにきちんと目的を一本化したほうがいいんじゃないかというような提案も出されていました。こちら辺はもう一もめあるんじゃないかというふうに思います。なぜなら、選抜に使うんだったらなるべく後に受けたほうが得ですね。しかし、質保証だったら早いうちからきちんと段階を経て受けるべきだと、これは当然だと思いますので、私はその学習改善を目的とした質保証のほうにできるだけ使う方向で意見を表明していきたいというふうに思っております。

次期学習指導要領については、35年以降は新しい必修科目において情報ですとか歴史総合とか、そういうところも含めて言っていくと。この後に選抜に使うかどうかを考えるというふうにしております。

これが質保証の仕組みですね、高校の基礎学力テストをどういうふうにするか。PDCA、プランですね、教育目標を高校が設定して実行して、そのチェック、評価の一つとして高等学校基礎学力テストを使っていきましようということです。これが小さく書かれているんですが、上記の取り組みを通じて得られたさまざまな情報を、学校評価を行う際の

判断材料として活用するというふうにしています。どう判断材料と使うかというところですね、さまざまな評価結果から明らかになった指導困難校など支援を要する高校に対する教員加配や補習指導員の配置などということで、この基礎学力テストの結果で指導困難校というのがわかった場合には、国としてフォローしますよというふうなことでこれを使っていきましょうというような、つまり質の保証ですね、底上げというところにこれを活用しようというふうに今は出されています。これが基礎学力テストですね。

「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の導入について

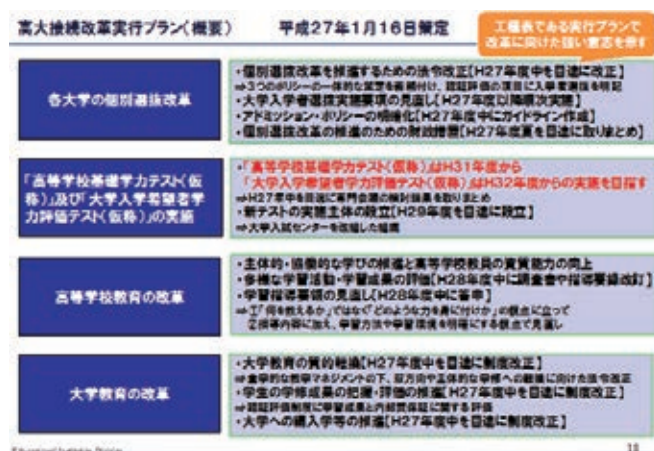
大学入学希望者学力評価テストのところでいきますと、目的は、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握するというふうに言われています。大学に入る準備ができていのかどうかを見るものということです。ここでは知識・技能を十分に有しているかの評価を行うことに加え、思考力・判断力・表現力を中心に評価すると。一部ではゆとりにもまた戻るんじゃないかみたいな新聞報道がありまして、そうではないということを行っています。きちんと知識・技能を評価した上で、思考力・判断力を中心に判断していくと。

具体的な制度設計ですが、これも2段階になっています。32から35と36年度以降というふうになっています。まず、32年から35年でいきますと、まず、試験科目についてはできるだけ簡素化しながらどんな問題が出るかというところ、多肢選択式問題に加え、問題に取り組むプロセスにも解答者の判断を要する部分が含まれる問題、記述式問題などというふうに書かれています。例えば、今のマークシートは必ず1つ正解がある前提ですよ。そうではなくて、1つではなくて、2つ、3つ、あるいは全部正解、あるいは1つも正解がないといったような鉛筆を転がして何回かに1回は当たるよというふうではない問題を回答方式にしていこうとか、あるいは

連動型複数選択式っていうのはロジックで考えていくと、3つぐらい連続した問題をしていくとその考え方がわかるような問題が今できるらしいんですが、そういった問題を導入する。あるいは記述式問題、これもまだ意見が割れているというか、これはそれだけの記述式を回答する、あるいはそれを評価するためには多くのお金とパワーがかかります。それをやりますか、どうですかというのは、まだ会議の中でも意見が分かれているというか、技術的に間に合うのか、できるのかということも含めて、議論が進められているということだというふうに思います。

先ほどC B Tの導入というのが基礎学力テストでありましたが、学力評価テストのほうもC B Tを導入すると。しかしこれは36年度からですね、つまり新しい学習指導要領のところからC B Tを導入しようと、その前は試行というふうに言ってます。なぜ基礎学力テストはC B Tを前提に進められていて、こちらはC B Tが遅く入ってくるのかということ、基礎学力テストは選抜ではないんですね。こういう言い方は正しくないと思いますが、ちょっと間違っちゃっても何とかなるかもしれないと、しかしこちらは選抜に使うのでもう間違ったら大変だということで、多分遅くなっているんだろうというふうに思います。そのためのシステムの安定性やセキュリティの確保などを検討していくというふうになっています。こちらのフィードバックの方法も素点ではなく多段階表示による提供、あるいはパーセンタイル、上位何%とか、そんなふうに入っているというような形の表示になると。これは会議のほうでどれくらいの段階別表示になるんですかというふうなことを質問したんですが、まだこちらは検討中ということでした。現状のところこういった形の検討状況になっています。

こうしたことを通じて、高校までの教育は高校の基礎学力テストを導入しながら質の確保・向上を図っていくと、あくまでもこれは高校の質の確保・向上であって、大学は大学



で質的転換をしていきながら入学者選抜を変えていくというような形で、下から続いて生きる力、確かな学力を育成していこうというような形になっています。これをやり遂げるために高大接続改革実行プランというのが1月の16日、12月22日に接続答申が出されて1月16日には文科省の中に高大接続改革プロジェクトチームというのができました。それで、実行プランが出されました。前の文部科学大臣、下村さんにインタビューしたときに、このプランはどうしてつくられたんですかと聞いたら、政権が変わっても大臣が変わってもこれはやり遂げるというような意思で工程表をつくったんだというふうにおっしゃっていました。

高大接続改革実行プラン(概要) H27.1.16策定

その工程表である実行プラン、何が書かれているかということ、細かいのはいっぱいあるんですが、大きくまとめるとこの4点になります。大学教育の改革、高校教育の改革、それをつなぐ共通テスト、それから大学の個別選抜、これを変えていこうという形になっています。この中で、高等学校基礎学力テストは平成31年から、2019年ですね、大学入学希望者学力評価テストは32年度なので、オリンピックが終わった年ぐらいから実施を目指そうということで進められています。並行して、高校の教育改革、大学教育の改革というのも、27年、28年ぐらいで進められているということがわかるというふうに思います。

この試行期間とかスケジュールがいろいろわかりづらいということをよくお聞きしますので、簡単に、勝手に図式化しました。上が基礎学力テスト、下が学力評価テスト、横が年度ですね、そうすると、31年と32年から導入するというふうに言っていますが、学習指導要領が改定されるのが34年になります。ここで変わりますんで、ここで、高校1の子が学年進行で、2年生になったときに基礎学力テスト、3年生になったときに学力評価テストが本格化するというところで、35年、

36年というふうになっているわけです。この期間を試行期間ということで、試行期間をどうするかというのはまだこれから一もめあるんじゃないかなというふうには見ております。もう再来年にはプレテストというのを導入すると言ってますので、そろそろ問題が出てこないとまずいかなというふうに思っております。システム改革会議の中でも、ワーキンググループからなかなか問題の中身が出てこないで、どうなんですかというふうな質問が出ているというような状況だということで、これが今後影響があるかなというふうに思っております。全体的にはこんな図になっておりますが、これホームページで見られますので、ぜひA3でプリントアウトしてごらんいただければというふうに思います。

今までが共通試験でしたが、じゃあ、個別選抜ってどう変わっていくんでしょうかということです。これは答申の中に出ているものではなくて、答申の前に10月10日の部会で出てきたものになります。基本的には変わっていないというふうに個人的には思います。各大学の個別選抜における主体性・多様性・協働性の評価ですね。先ほどの3つの学力要素の3つ目っていうふうになります。こんなことが書かれています。従来型の公平性・客観性、つまりペーパーテストによる序列化、点数で割り振って落としていくようなものではなく、多元的な評価の妥当性・信頼性の確保という表現がされています。ここに公平な選抜とは数値で採点結果を出せる問題を用いた試験の点数のみに依拠したものであるという従来型の公平性・客観性を変えていこうというようなことが書かれていて、説明責任確保のためには、これ主語がないんですね、主語が誰かということと大学がだというふうに思います。大学が説明責任を果たすためにはアドミッション・ポリシーに基づく多元的な評価の妥当性や信頼性に注目するというふうに書かれているわけです。

各大学の個別選抜の考え方について

じゃあ、どのような評価方法があるかとい

とんどは教科型の問題。大学入学希望者学力評価テストは教科型を半分ぐらい入れながら、思考力・判断力・表現力を問うような、こんな言い方がされてました。合教科、合科目型、教科を合わせるですね、あるいは科目を合わせるですね。教科を飛び越えたような問題、あるいは総合型といったような問題が出されるということが答申の中には書かれていました。

その審議会の中でこんな質問が出ました。今の学習指導要領下の中で、そういった教科を超えた問題って入試で出しちゃっていいんですかという質問が出ました。それに対して文科省はどうお答えになったかという、今の学習指導要領でも教科を超えた学習をするようにというふうに、幅広い学習をするようにというふうになってるそうです。しかし、今の入試がそうならないために高校でそういった授業がなかなか行われていないということで、それはきちんと入試を変えることで行っていこうということで、それじゃあ、それでいきましょうということになっています。個別選抜は基本的に思考力・判断力・表現力を見ながら、主体性・多様性・協働性を見るような選抜にしてくださいと。

ただ、前回の会議でも国立大学協会のほうからは、個別選抜でも学力試験をやらざるを得ないんじゃないかと、今のところそういった方向で検討してるという話が出ました。当然、本当にそれやるんですかというふうな質問がいろいろ出まして、長崎大学の片峰学長によると、この大学入学希望者学力評価テストの難易度がどの程度かがわからない、ここが信用できなければ個別選抜ではもう一度学力評価をせざるを得ないというような発言が出てました。つまり、この大学入学希望者学力評価テストの難易度をどれくらいに設定するのかというのが非常にこれから大きな課題になってくるかなというふうに思います。趣旨としては、これは納得してるけれども、ここがわからない限りは今なかなか決断ができないというような状況だというふうに思いま

す。早くその中身が出てくるといいかなというふうに思っております。

高大接続改革の全体イメージ

じゃあ、高大接続改革全体のイメージ、これが8月27日に出てきた資料の中に入っているものですが、高校教育は教育内容を見直して、学習指導要領を改定して、指導方法を改善したりとか先生方の指導力を向上させる、あるいは評価も多面的な評価を進めていくというような、学力はその中の1つだというふうな表現をしています。その上で、大学は育成すべき人材像に基づく3つのポリシーの一体的な策定を法令上位置づけるというふうに言っています。3つのポリシーってあんまり聞きなれない言葉だというふうに思います。3つのポリシーとは、ディプロマ・ポリシー、学位授与方針ですね、日本語に直すと。どのような力を身につけた人に学位を授与するかというような方針です。つまり、うちの大学はどんな人材育成するのかってことですね。そのためにどのような教育内容になっているのか、カリキュラム・ポリシーですね。これを、先ほど申し上げた体系化してくださいというふうに言っています。つまり学位ごとにカリキュラムのポリシーをきちんとつくってくださいよということです。それも、卒業後を見据えた社会との連携を強化しながらつくってくださいということです。そんな教育を受けるためにはどのような人に入ってきてほしいのか、これがアドミッション・ポリシー、入学者受け入れ方針になります。どのような能力をどのレベルで求めるのかを明確化してくださいと言っています。

ここにこんなふうに書かれています。大学入学者選抜、各大学においてアドミッション・ポリシー、入学者受け入れ方針に基づき、例えば下記の方法から活用する評価方法・比重・要求するレベルを決定・公開してくださいというふうに言っています。例えば下記の方法ってこんなことですね。例えばどんなことが考えられるか、いや、うちは非常に高度な学問をやっている難しい教育をやっている

す。なので、例えばうちの大学に来るんだったら学力評価テストはAレベルをとってきてくださいと、それは8割ぐらいの比重で評価しますよと、そのほかは2割ぐらい面接で評価しますというような大学があってもいいと。あるいは、いや、うちは違いますと。日本を支える分厚い中間層を育成する大学だということであれば、そういったカリキュラムであれば、大学入学希望者学力評価テストはもしかしたらDレベルでいいと。しかし、きちんとした記述、論文方式、あるいは高校時代の学習履歴、それから入学してから何をしたいか、それから人柄を見る面接みたいなものを3対3対3対1で見ますよというふうな大学があってもいいと。いやいや、うちはそうじゃないと、すばらしい先生方がそろってるので、高校時代そんなに部活ばかりやっちゃってあんまり勉強しなかった子も来てくれれば、きちんと育て上げるような教育の仕組みになってますよってあれば、もしかしたら学力評価テストはほんの少しの割合であって、高校時代の活動履歴、あるいはエッセイ、入ってから何をしたいか、あるいはプレゼンテーションみたいなものを3対3対3対1みたいな、そういった評価で見てもいいですよということを言ってるわけです。そのフラッグを大学側が立ててくださいと、説明責任は大学側にありますってことを言っているわけです。なので、ここの中身をつくるのが非常に重要になってくるわけです。

アドミッション・ポリシーに盛り込むべきポイント

じゃあ、急にアドミッション・ポリシー、入学者受入方針ってなかなか難しいですよ。今までは結構こういう大学が多かったんです。社会に役立つ優位な人材育成すると、大学名隠したらどこかわからないというのが正直多かったわけです。これをきちんと明確にしてくださいと。盛り込むべきポイントというのをことしの3月に、文科省、事例集の中に書いています。ガイドラインを来年の3月に発表するというふうに言ってますが、アドミッション・ポリシーに盛り込むべき3つのポ

イント、1つ目、各大学の強み、特色や社会的な役割を踏まえつつというふうに言っています。例えば、各大学は強み、社会的な役割が違いますよねと、東大と島根大学では当然役割が違いますよねということです。早稲田と慶応でも違いますよねということ言ってるわけです。その各大学の特色を明確にしてどのような力を発展・向上させるのか、そのために入学者に求める能力は何でしょうか、それをどのように評価するのか。つまり簡単に言うと、うちはこんな大学なのでこんな人材育成しますと、だからこんな人に来てほしいですと、だからこんなふうな評価をしますというようなことをきちんと盛り込んでくださいということが書かれているわけです。これが、今、このプランの中でしていますが、私はここの会議体に入ってるんですが、この新テストの中身ですね、先ほどのCBTとかIRTとか、あるいは記述式がどうかとか設問の中身とかってというのはワーキンググループで非公開で今議論がされていまして、これから年末にかけて具体的な中身が上がってくると。したら、かなり具体的な議論が進むんじゃないかというふうに思っております。並行して、中教審の中で高校と大学の質保証のことが進められているということです。

各方面で大学入試改革の議論が急速に進みつつある

じゃあ、そうか2020年かと、ちょっとおくれて、もしかしたら平成36年からセンター試験変わるのかと、ここで変わるのかと思ったら実は大間違いだと私は思っております。もうこういった形で動くのは方向性が決まっておりますので、各大学の個別試験から変わってきています。例えば東大ですね、東大、今週の月曜日から推薦入試の出願を開始しましたが、初めて推薦入試を導入します。100名です、わずか100名。東大の定員が大体3,300名ぐらいですから、全体の3%で推薦を行っていくということで、じゃあどんな人材を採っていくのかというと、世界的視野を持った市民のエリートを育成する

というふうに言ってます。

京大も100名、特色入試というのを導入します。京大は東大とは違うというふうに言ってます。テストで高得点をとるためだけの受験勉強を疑問視すると。じゃあ、どうするかというと、どのような人を求めるかということ、みずから課題を発見しチャレンジするという自発的、能動的な学びのポテンシャルがある人、これがアドミッション・ポリシーになるわけですね。それをどう評価するかというと、学部教育を受けるにふさわしい能力並びに志を総合的に評価すると。志を評価するんですよ、京大。どうやって評価するんでしょうかいうと、学びの報告書、学びの設計書を書くんですね。高校時代どんなことに頑張ってきたのか、京大に入ったら何をしたいかの設計書を書く。これが京大の特色だと、これで志を見るっていうふうに言ってるわけです。

九州大学はまた違いますと。もう既に、21世紀プログラムというのを長年導入されてますが、学部には属さない横串を通した26名の4年間のオーダーメイドプログラムをつくっています。この子たちは学部には属さないの専門性の高いゼネラリストを育成するというふうに言っています。こういった人材育成するのでどのような評価方法をするかということ、2日間にわたって試験あります。1日目は課題出してレポート出し直しを3回やるわけですね。2日目は、終日ディスカッションです、オールディスカッション。これを、先生方が複数いてルーブリック評価で選抜をしていくというような形になっています。

東北大学はまた違います。うちのAO入試は学力だと言っています。基礎学力プラスアルファだと言ってます。アルファって何でしょうかと、意欲・適性・好奇心だと言ってます。じゃあ、それをどうやって見るかということ、第一志望ですというふうに言ってます。あれ、東北大学受ける子ってみんな第一志望なんじゃないのって思ったりしますよね、実はそうでもないそうです。入ってから、あれ

っていう子もいるそうなんです。ですので、じゃあ第一志望どのように見るかということ、志望理由書というのをきちんと書かせて、なぜ私が東北大学に入りたいかというのをリフレクションというらしいですけども、自己内省していくということだそうです。なので、特別な対策は不要だと。

これ落ちたら一般入試を受けてくださいということですね。ストレート卒業率、GPAとも非常に高く、今、定員の18%をこれで採ってるんですが、数年かけて30%にしていくと。

大阪大学も、これ紙にないんですけども、口頭でお伝えしますと、世界適塾入試というのを今年度から始めます。それは10%です、定員の。これを3割に広げていくというようなことをおっしゃってます。

お茶の水大学の入試は新フンボルト入試っていうんですね。何かというと、文系は図書館入試、理系は実験室入試っていうことで、例えば文系でいうと、課題に対して図書館の蔵書を全部使っていいから自分で課題を解決するようなレポートをつくってください、プレゼンしてくださいということになります。何でかという、フンボルトの考え方は、もともと大学というのはゼミナールを実験室とか図書館を使ってやってたということなんです。なので、そういった大学だということ、定員は多分20名とか30とかそのぐらいだったと思いますが、そういうところから始めていくということです。

つまり、何が起きているかということ、全員が一遍に変わるってことは多分ないと思います。多分この100人教室だったら、前に座る30人ですね、意欲の高い30人をこういった新しい形のAO型の入試で採っていくというような形で、この五、六年は進んでいくんじゃないかというふうに私は思っています。国立大学協会も9月に発表したアクションプランの中で、30%をこういった新しいアドミッション・ポリシーに合った人材を採っていくというような表現をしていますので、

じゃあ、私立はどうかというと、私立も進んでいます。国際基督教大学さん、ICUですね。ここは1学部しかないんですね。リベラルアーツ教育をしているので、入るときには専攻を決めません。卒業をするまでに自分で専攻を選んでいく形になりますが、その適性をはかる試験をやっています。先ほど言った合教科、合科目型、総合型の問題を出します。オープンキャンパスで公開するのがあったので私は行ってきました。どんな問題かというと15分間講義を聞きます。その後に、そのときは環境問題でした。問題開いてくださいって言うと、4章立てになっています。1章目はちゃんと聞いていれば答えられるような問題ですね。2章目から人文科学、自然科学、社会科学というふうに章立てがしてあって、リベラルアーツの項目になってきています。問題はどんな問題かというと、パンドラの箱をあけてしまったという表現がありますが、どういうことでしょうかとかですね、オゾン層が破壊されるとありましたが、今のままだと何年後にオゾン層が破壊されるか計算しなさいってあるんですよ。しかしそれは四則演算できるような問題なんですね、考える力を問う。あとはオゾン層とありましたがオゾンの化学式を書きなさいというんですねO₃ですよ。そういったような総合型の問題が出されます。記者会見があったので質問しました。映像でもいいですよ、どうして映像でもなく文章でもなく講義なんですかと言ったらすぐに答えか返ってきました。ICUは大学に入って講義をちゃんと聞ける子に来てほしいと思ってますと、入学者選抜は大学のメッセージなんですという言い方をされたんですね。ちょっと泣きそうになりますよね、そういったことがされています。

高大接続改革に関する体制について (案)

高大接続システム改革会議

中央教育審議会

高等教育

大学教育

職業教育

個別進捗の促進

デジタル・技能

大学・短大・専門学校

大学・短大・専門学校のデジタル・技能

大学・短大・専門学校のデジタル・技能

広 報

・改革推進に当たり、市民等に対する説明、説明の機会を確保する。

[illegible][illegible]

東北大学 A0入試：各学部のアドミッションポリシーに基づき「基礎学力 + α（**意欲・適正・好奇心**）導入
 目的：基礎学力の確保 → 一人ひとりの個性に合わせた学習の進捗に集中すること、第一歩を踏み出す意欲(自己啓発と地味な機会)獲得、意欲性の18%向上、文・理・工・農・医学部・センター試験制対応。 ① 国語・英語・数学・国・英・西・仏・独・ポ・中・韓・センター試験制対応
 基準：基礎学力：高校標準程度(基礎的知識、理解力)、小論文・研究課題(問題意識、見聞力)、工・農・センター試験(基礎的知識) + ② 意欲・適正・好奇心(基礎的知識、理解力、応用力、表現力、探究心)。必要科目は各学部により異なる。

国際基督教大学 2014年センター無し・2015年度一般入試受験者にIPVIA-2教育適性を活かす新方式を導入

関西学院大学「東進力のある世界市民」の育成、グローバル入学試験

①国際感覚を涵養する素の力の養成入学試験
英語・数学検定・英語による口頭試問・面接検査・面接
②英語能力・国際交流能力を育成する素の力検定と入学試験
英語・数学検定・筆記検査・面接検査(対面方式・日本語小論文)・面接
③入学試験グローバルパスポート入学試験

2月に「第1年度セ
ンター試験」

[illegible] ERIC

Financial Institutions Division 27

その中に高大連携課と入試課が入っていて評価基準なんかを決めていると。

それから追手門学院大学さん、ここは育成型入試というのを、島根大学さんも導入されていますが、導入しています。こちらの大学さんはいわゆる分厚い中間層を育成する大学さんで、第一志望が余り多くなくて自己肯定感がそれほど高くない子が来る傾向があったということで、アサーティブ入試というのを導入しました。アサーティブというのは聞きなれないんですが、人と何か会話をしながら自分の方向性を決めていくというようなことだそうです。選抜型から育成型ということで、大学職員でアサーティブオフィサーという方がいらっしゃって、面接ではなくて面談を夏ごろから行っていて何度も指導をすると。大学で何をしたいのか、なぜ大学に行きたいのか、なぜ追手門なのか、といったことを聞いています。アサーティブ入試自体は52名なんですけども、この面談を経た子が100名になっているということで、入った子たちの意欲は非常に高いというふうになっています。方向性は大学の理念に合った人材の、学力プラス意欲の多面的評価になります。全員ではなくて、先ほど申し上げたように、まずは教室の前から座る意欲の高い30%ですね、これをどう採っていくかというのが課題になってくるというふうに思います。

2) 大学に求められているものは何か

大学の特色を生かし、入り口と出口を理念で一貫させる経営

じゃあ、大学に求められてるものは何でしょうか。大学は建学の精神があって、教育の理念があって、さっきの3つのポリシーがあって、どのような卒業生を社会に送り出すのかというような役割があります。ここにどのような学生に来てほしいのかというのが、入り口、中身、出口まで一貫した経営、教育マネジメントが求められてきているということが言えると思います。入学者選抜は大学のメッセージだということですね。これをきちんとPDCAを回していくのがエンロールメン

ト・マネジメントっていうことですね。これをきちんと測定していく、これが、IRによる検証ということが、PDCAサイクルをこれから次の多分内部質保証はこんな形になっていくというふうに思います。

今大学に求められているものは

大学に求められているものは何か、世界的な傾向としてアウトカムですね。学習成果重視、履修主義から成果主義に変わってくるといことで、これはOECDのPISAとか、あるいは基礎学力テスト、国際バカロレア、こういったところもみんなそうだというふうに思います。つまり何かというと、入学の国、今まではどの大学に入ったか、これがゴールだったわけですね。それで、シグナリング効果というふうに言われてました。そうではなくて入ってからどうなる、卒業するときどうなるかというときの大きなプロセスだというふうに思います。多分、2、3年や5年ぐらいでは変わらないと思いますが、10年、15年かけてこれを実現していくと。つまり大学生活で4年間でどのような経験を経て、これは成果、成果外ですね。含めて生徒、学生が何ができるようになって、ラーニングアウトカムですね、それが客観的に説明できるか。これを、各大学の個性ありますよねと、それをどのような人材育成するのかのコミットメントをしてくださいということが言われているというふうに思います。

言葉、言い方を変えます。学校を卒業すると何ができるようになるのか、どんな人材を社会に送り出すのか、これがディプロマ・ポリシーですね。それができるのはどのような理念に基づいて、どのような教育の仕組みがあるからなのか、これがカリキュラム・ポリシーですね。そのためにはどんな思考や意欲を持った学生に来てほしいのか、どのような要件、学力だけでなく意欲、活動実績等が必要なのか、これがさっき言ったカレッジ・レディネスになるわけですね。これは多分、東大と島根大学では全然違うというふうに思います。この準備ですね、これがアド

ミッション・ポリシーになるということです。

3) 高校に求められているものは何か

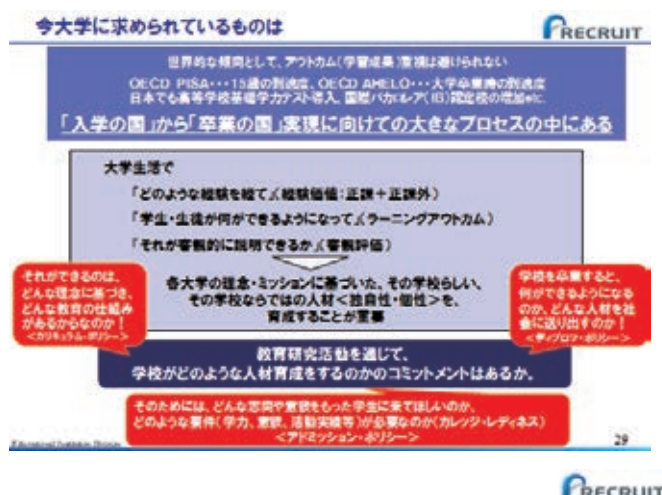
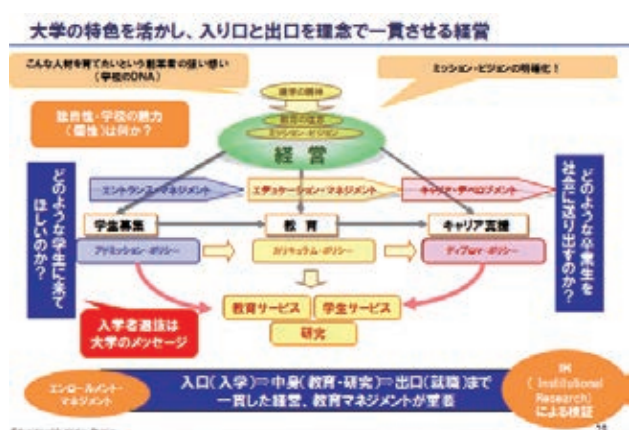
新しい学習指導要領が目指す方向性について

じゃあ、高校に求められてるものは何かですね、これが学習指導要領改訂ということになります。

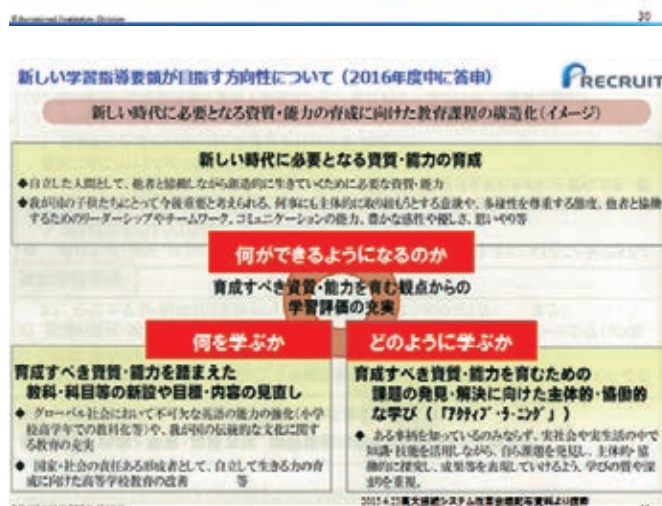
ちょっと前を見ていただければと思いますが、この3つありますよね、以前は何を学ぶかが大事だったというふうに思います。今議論の進め方が若干変わっています。まず、何ができるようになるのか、これアウトカムですね。そのために何を学んでどのように学ぶのかというふうなことが議論されています。何ができるようになるのかを見定めた上で教科をどうしていくか、それをどのような教え方をしていくのかという順番で議論がされているそうです。教員ですね、先生方の指導力を高めて教育課程を見直して、多面的な評価を推進していくという形で今の議論が進められているということです。

高校における今後の評価の在り方について

ここが多分接続のところになると思うんですが、高校における評価のあり方ですね、これは逆ピラミッドになってますが、私が注目しているのは、ここに義務教育段階の学習内容の学び直しというのが出てきてます。この上で、教科をちゃんとやった上で、さまざまな高校生が取り組む活動をきちんと評価しましょうということ、日常的な評価をここに指導要録の改善ですね、指導要録というのは、調査書のもとになる日々の活動をつける学習カルテみたいなものだというふうに伺っていますが、それを改善していこう。日々の活動を通じて幅広い高校生が取り組む多面的な資質能力を評価していこうというふうに高校が変わってきます。高等学校基礎学力テストはここなんですね、位置づけが。つまり入学者選抜じゃないんですよ、ということです。なので、ここをきちんと見直していこうと。例えば基礎学力テスト、じゃあ、普通科の進学校は要らないんじゃないかというふう



高校に求められているものは何か



な議論があります。私はそうは思いません。なぜなら私立の文系クラス、進学校でも数学が中一レベルでとまってる子がたくさんいます。歴史が苦手で、私立理系クラスはそうした歴史が中学のままでとまっている子たちもたくさんいます。そういった子たちを、基礎力をちゃんと測定していく必要があるのではないかなというふうに見ております。

4) 高校・大学の教育を通じて求められているものは ～今回の高大接続改革が及ぼす影響～

じゃあ最後に、高校、大学の教育を通じて求められてるものは何か。今回の改革が及ぼす影響ですけれども、大学への影響でいくと、募集活動がリクルーティングに近い募集になってくると、企業の採用活動に近くなってくると思います。アメリカで学生募集はリクルーティングというふうな言い方をします。3つのポリシーに合った募集ですね。今まではとりあえずどんな方法でもいいから志願者の量を集めるというのが一番のホットイシューでしたね、大学では。そうじゃないと、ちゃんと大学ごとに合った人材を募集してくださいと。そのためにアドミッションオフィスを拡充してくださいと。この間、ボストンに行ってきた、ボストンのコンソーシアムでアドミッションオフィサーで大体何人ぐらいいるんですかというざっくりとした質問をしました。規模とか募集エリアによりますが、大体5人から25人ぐらいというふうな言い方をされてました。それと、あとOBとかOGの方を組織化して、そういったことを、アドミッションオフィスを形成してるというふうに言っていました。

それから、選抜評価基準をきちんと策定していく。入学がゴールではなくなりますので、入った後の学生をどのように育てていくか、その学習成果をどのようにはかっていくかということが重要になってきます。高校はそういったコアの学力をきちんとはかっていって質の向上を図る。それから合教科・科目型の対応、アクティブラーニング教授法、英語の4技能ですね、読む、書く、聞く、話す、そ

れから活動履歴を管理する学習カルテやポートフォリオ、こういったものが必要になってくるかなというふうに思っております。

高校・大学を通じて求められているもの

じゃあ、高校、大学を通じて求められるものは何か。まず、受動的な学生をいかに主体的、能動的な学生に変えていくかということなのが重要になってきます。最初に申し上げた主体的に取り組んでチャレンジできる人材ですね。もう一つ、Learn How To Learn! っていうことが言われています。継続して学ぶ力をつけるですね。これどういうことかということ、今、企業の寿命何年ぐらいだと思われますかね。30年前、私が入社したころは企業の寿命30年説というふうに言われていました。どういうことかということ、大学卒業して二十二、三ですよ。30年勤めたら55歳で定年だったんですね、昔。豊かな年金生活が待ってたんですよ。今は何と18年だそうです、企業の寿命。都市銀行、私が入ったころ13行ありました。今はメガバンク3行ですよ。損保、CM見たらわかりますよね。合併しすぎて社名を言えないですよ。もうそういった状況になってきています。なので、一つの企業ですずっと勤め上げるというのはなかなか難しい時代になってくるかもしれません。そうしますと、いつでも学び直していくっていうような力が必要になってくる。大学、高校で学んだ学力というのはすぐに剥がれ落ちてしまいます。それをメンテナンスしていく力が必要だと、学ぶ習慣ですね。そのために先生が何を教えたかっていうインプットですね、チョークアンドノート型のインプットの教育ではなくて、学生が主語になって、学生が何を学び何ができるようになったかっていった、Learning outcomesを重視した形に変わっていくと。なので、学び方改革、TeachingだけではなくてLearningへとというふうに変わってきている。

最近、高校の先生方、大学に行かれたことがありますかね。大学に行くと図書館が変わっ

ていることが、もうお気づきになると思います。図書館ではなくてラーニングコモンズになっているんですね。昔の図書館っていうのは誰にも邪魔されずに1人で知識を詰め込むことができた場だったんですね。今の図書館はそういうスペースもあるんですが、得た知識をディスカッションしながら高めていく、そういったラーニングコモンズというのができています。そういった形で知識をメンテナンスしながらoutcomes重視に変わっていくということになります。

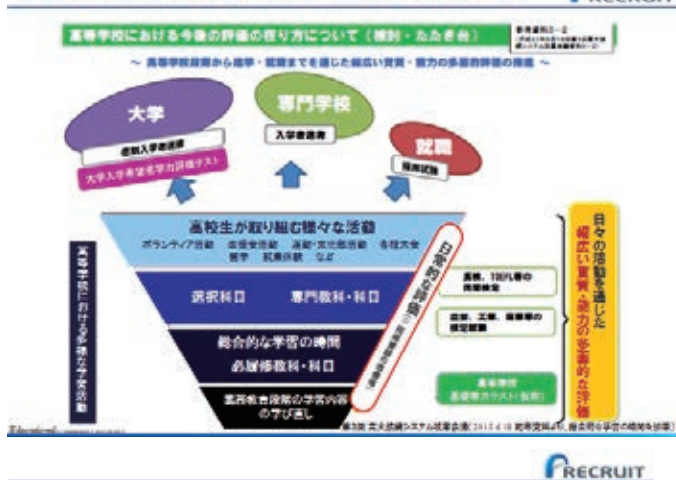
今までの大学は建学の精神があって教育の理念があって3つのポリシーがありました。多分、大学ができたころはきちんとこれがはっきりしてたと思います。しかし、高度成長期、人口ボーナス期、どんどん学部をふやしていったりとかいろんなことがあって、なかなかこれを見失ってる部分があったというふうに思います。気づいたらギャップができました。高校、社会ですね、大学から見ると基礎力を備え学ぶ意欲のある学生に来てほしいというふうに思うわけです。しかし、高校から見たら大学の個性がわからない。先ほど申し上げたように、大学の数は親御さんの世代から見ても1.5倍になってるわけです。大学で800、短大が350、専門学校が2,800あります。その中から1校選ばなきゃいけないですね。

学部名から学ぶ内容がわからない。1991年までは学部、いわゆるカッコ付きの学士名称は29しかありませんでした、法商経文理工農とかですね。今大体幾つぐらいあると思いますか、学部の名称。何と700以上あるんです。昔は英語を学びたいっていったら英文科か外国語学部勧めればよかったわけです。今は国際何とか学部とか、何とかコミュニケーション学部いっぱいありますよね。この間、高校生にインタビューしたら、この大学ってなんちゃって国際ですよって言うてました。もう学部名から学ぶ内容わからない、だからみんなオープンキャンパスへ行

高校教育の質の確保・向上に向けた全体的な取り組みについて（検討・たたき台）



高校における今後の評価の在り方について（検討・たたき台）



高校・大学の教育を通じて 求められているものは

今回の高大接続改革が及ぼす影響

<大学への影響>

- ・リクルーティングに近い募集（個性化の進展、多様な評価方法）
- ・3つのポリシー（AP、CP、DP）の策定⇒アドミッションポリシーにあった募集への対応
- ・アドミッションオフィスの拡充（専門スタッフの育成）
- ・選抜、評価基準（アセスメントポリシー）の策定⇒多面的・総合的な評価方法
- ・入学後の学生の到達度（学習成果）の評価をどのように行うか

<高校への影響>

- ⇒授業改革、学習履歴の管理、使える英語力
- ・基礎的な学習（高校のコアの学力）の到達度を客観的に把握し、質の確保・向上を図る
- ・合教科・合科目への対応（教科を越えた学習指導や教材開発）、アクティブラーニング教授法
- ・英語教育は4技能（読む、書く、聞く、話す）への対応⇒特に聞く、話すへの対応
- ・活動履歴を管理するシステム（学習カルテやポートフォリオ）の導入⇒指導要録の改定

くわけですね。将来の自分の姿を描けるか、大学に行って、これが問われてきています。企業から見ても競争環境が変化してます。30年持つと思ったら18年しか持たなくなっていましたってことですね。なので、変化に対応できる人材育成してほしいと思っているわけです。

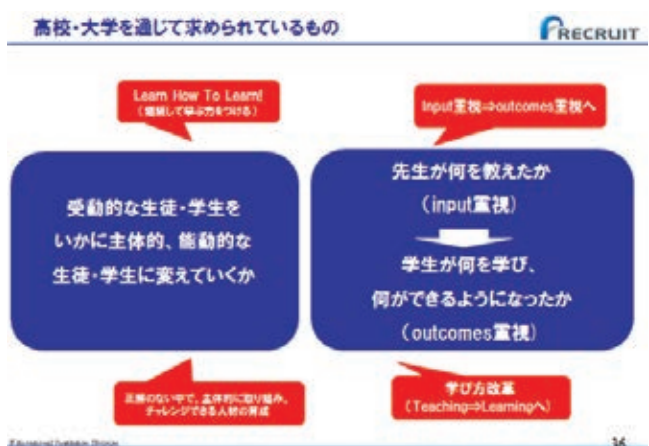
そもそも、大学改革のスピードが遅過ぎるのではないかというふうな意見もあって、ことしの4月に意思決定のスピードを上げていくということで、学長中心のガバナンスというふうに法律が改正されたわけです。この入り口とのギャップは、大学入試改革における高大接続の改善で変えていこう。企業が悪い、大学が悪いって言ってる時代じゃなくて、企業と大学、地域が協働して人材育成していこうというような時代になってきました。ここで到達度、両方ですね、何ができるようになったかっていうのがこれからは非常に重要になってくるといふふうに思います。各段階でのアウトカムですね。

高校⇒大学⇒社会へのより良い接続が課題

私、審議会で一番ショックだったことがあります。何かというと、企業が大学の成績を見ていないのは知っていました。大学が高校の調査書をあんまり見てないのも知っていました。しかし、高校の校長先生が、いや、最近の中学の成績は当てになんないんですよって言ったときに結構ショックを受けました。全然つながってないじゃないか、この国はということですね。なので、きちんとこれを接続していく、その上で大学がきちんとフラッグを立てていく、個性をつくっていく。ぜひ高校の先生には、大学の方が高校訪問に来たら質問してほしいと思います。どんなディプロマ・ポリシーなんですか、どんな教育方針なんですか、どんなアドミッション・ポリシーなんですか、うちのどんな子がおたくの大学行ったらハッピーになれるんですか、こういったことをきちんと、プレッシャーをかけるとは言いません。きちんと高校側からそういう質問を投げかけることで大学も変わってい

くというふうに思っております。

また、いつもどおり早口でまくし立てるようなお話となっていました、スピードラーニングだと思ってキーワードだけお持ち帰りいただきたいと思います。どうもありがとうございました。



ご清聴ありがとうございました！

各データや記事はHP内に掲載しています
リクルート進学総研、または「カレッジマネジメント」/「キャリアガイダンス」で検索してください

大学・専門学校・進学に関するさまざまな調査データを掲載
リクルート「進学総研」
<http://sooken.shingakunet.com>

ご質問・ご意見ご感想・ご要望も、ぜひこちらからもお願いいたします。

メールマガジンの配信のお申込みをいただくとリクルート進学総研Webサイト/キャリアガイダンス.netの更新情報をもれなくお伝えします

全国の新規・研究会情報も毎月お届け！

お申し込みWebからこのボタンから申込画面に進み、必要事項を入力してください